



Title	「感性」を基盤とする学習環境の整備に関する試論
Author(s)	阿部, 彰
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1998, 24, p. 89-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11524
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「感性」を基盤とする学習環境の 整備に関する試論

阿 部 彰

目 次

はじめに

1. 人類の進化と「感性」の醸成過程
2. 人間生活における「感性」の重要性
 - 1) 創造、個性の源泉
 - 2) 総合的な判断力の触媒
 - 3) 「いのち」や「生きること」への気づき
3. ライフ・ステージと「感性」を基盤とする学習環境の整備
 - 1) ライフ・ステージと神経網の形成過程
 - 2) 「知性偏重」のひずみ
 - 3) 「感性」を基盤とする学習環境整備の必要性
4. 中学校における「感性」を基盤とする学習環境の一事例

——「合唱関連行事」の場合——

 - 1) 「合唱関連行事」の実施経緯と現状
 - 2) 「合唱」の意義と役割
 - 3) 「合唱」をめぐる学習環境整備の方向性

むすび

「感性」を基盤とする学習環境の整備に関する試論

阿部 彰

はじめに

「生きること」は、「感ずること」である。実感によってしか、「いのち」や日々の生活は確かめ得ない。教育・学習の営みが、その表面的なきらびやかさや力強さとは裏腹に空転現象（空洞化）やひずみを引き起こしているのは、この「感じること」を軽視し、ために、生活や「いのち」を、ひいては「生きていること」を実感できなくなっているからではないか。

本稿は、従来取り組んできた、このテーマに関わるいくつかの課題の底流にある、ひとつのアプローチであり、今後、理論的、実地的な作業を進める上での「覚え書き」としての位置をしめている。

1 人類の進化と「感性」の醸成過程

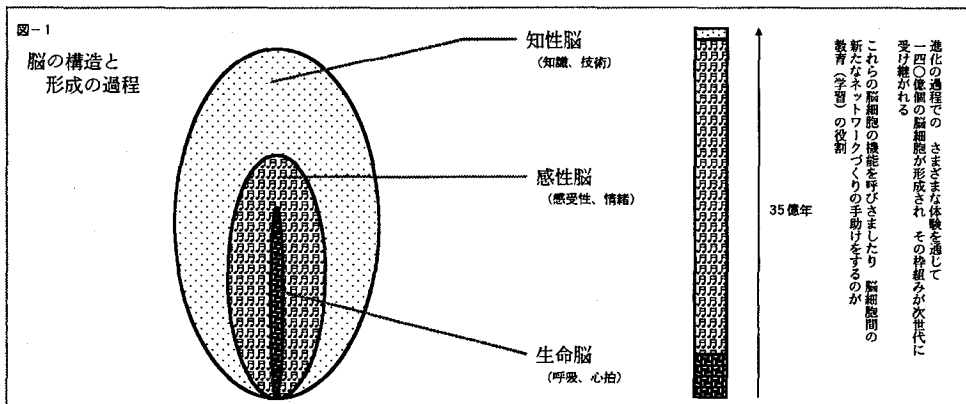
地球誕生後、10億年の歳月が経過して、大気中にあふれていた二酸化炭素を取り込んで繁茂した植物群に加えて、その炭酸同化作用によって空中濃度を増してきていた酸素に依存する「単細胞の動物」が発生する条件が整えられた。以来、35億年もの長い歳月をかけて、単細胞の動物は、数限りない生存のための試行錯誤をくりかえしながら進化し、多種類の動物を派生させるとともに、環境に最も機敏に適応する存在としての人間を、進化の最先端に位置づけた。この間、進化の過程で獲得された「生存のための成功体験」は、数限りない繰り返しを経て、行動プログラムを効率的に実施する中枢的な装置として脳細胞群を形成し、その枠組みが遺伝によって次世代へ順次継承された。

生物は、成長の過程で、それまでの進化の全プロセスをたどる、といわれる。かくして、多くの動物が、出生までに、ないし出生後短期間に、準備を終え、自立する。ところが、人間の場合は、脳細胞の構造そのものは遺伝で継承されるものの、機能については、多くを、生後に実際の体験を通じて「呼び覚ます」行為（学習）に依存せざるを得ない事情にあり、この「非能率性」がかえって人間行動の適応性を高め、進化に寄与したとされている。生命の維持を統括する部分（生命脳）の大部分は、胎内である程度の準備が進められるが、五感や感情、情緒にかかわる部分（感性脳）や知識、技術の考案、行使にかかわる部分（知性脳）は、生後、置かれた環境とのかかわりの中で、準備（脳

神経細胞の樹状突起の伸長<回路形成>、神経網の整備)が進められる必要がある。ここに、学習および学習を効果的に進めるための支援(育児、教育)の生理学的な意味と重要性がある。脳細胞の構造と機能が人類の気の遠くなりそうな長い歳月を経て蓄積、継承されたものであることをふまえ、「呼び覚まし」のプロセスには、進化の実相と背景が十分顧慮されなければならない。

脳細胞の目覚めは、まず神経細胞の樹状突起の伸長と感覚器官や運動器官との連結から順次はじまり、最も複雑な人間関係の処理のための、神経細胞間ネットワークの構築に至って、一連の準備を終える。この間、進化の過程で獲得された、あらゆる神経細胞がよみがえる訳ではなく、刺激の態様に左右され、器官や細胞との連結に至らなかった多数の神経細胞は萎縮して消滅する。生活に不可欠な視力でさえも、相応の時期に、相応の刺激によって目と脳細胞との連結がなされない限り、永遠にその機能と呼び戻すことはない。

人間の胎児・幼児期から少年期にかけては、脳細胞の準備が最も急速に、高密度で進められる時期であり、人類の進化の過程をふまえた学習や学習支援がなされなければならない。人類進化の大部分の歳月が、生きるため(種族保存、食料調達、危険回避)の感覚(五感)、いわば人類進化の過程で培われた自然とのコミュニケーション能力の獲得に費やされ、その悠長に流れる時間と空間の中でじっくりと「感性」が培われてきた(図-1参照)。そして、このことが、やがて「知性」を創造的に、健全に展開するための有効かつ確固たる素地となった。人生で最も目まぐるしく流れるこの時期の一日一日が、人類進化の過程で獲得した、基本的な力(人間性)を着実に身につける、かけがえのない日々位置するのである。



2. 人間生活における「感性」の重要性

人類が進化の過程で多くの歳月をかけ、成長の過程で、その機能の「呼び起こし」に優先的に取り組むべき位置にある「感性」は、「生きていることを裏付ける」、もっとも

身近で、普遍的な性格をもっている。つまり、五感を通じての感触、情感、情緒など、認知の基礎部分を占める「感性」は、まず、創造性や個性（自分らしさ）を発現する糸口となり、また、総合的な判断力（直感、勘、観）の湧出源となり、さらには、この本質をみきわめるきっかけ（気づき）となって、「生きる意欲と希望」を実感としてもたらし、かつ、「幅広く、持続的に生きる」ためのバランス機能をはたしている。

1) 創造、個性の源泉

いかに精緻な理論も、高度な技術開発も、出発点は現象や事実の「感覚的な把握」にある場合が少なくない。知的認知のもととなる感覚情報はすべて感性脳を経由し、そのフィルターを通して知性脳に到達するものであり、いわば、「感性」は、「知性に開かれた窓」としての位置を占める。しかも、現象や事実の、どの部分に焦点をあて、どのようにとらえるかは、人の経験、関心、興味によって大きく異なるので、思考や行動の展開に、その人らしさが顕著に表われることになる。たとえば、網膜上に投影される画像が物理的にはまったく同一にもかかわらず、視神経を経て認知される印象には際立った差異が生ずる。換言すれば、個性や創造性を発揮して生きようとするならば、日頃から自分なりの感じ方、とらえ方を大事にし、育む姿勢こそが大きな意味をもつことになる。いわば、「感性」は、「ほんとうの自分」との対話ルートでもある。

2) 総合的な判断力の触媒

「感性」は、知性脳に蓄積された知識群を整理、統合したり、複雑で流動性の高い事象に、総合的で、臨機応変かつ「味のある」指針を示すことがある。壁に突き当たり途方に暮れたとき、雑多に詰め込まれた知識群の中からある脈絡をたどって選択がなされ解決の方向性が示される場合があるが、このとき、知識を取り入れたときのエネルギーの電位差（定着度）を読み取り、見失っていた関心や問題の所在を探知するのに感性（直感）が有効に介在したといえる。また、文字やことばでは伝えられない部分のコミュニケーションと判断にも感性（勘、観）が有効にはたらく。対人関係の意思疎通において、言葉そのものの果たす役割はそれほど小さくなく、むしろ、しぐさ、表情、スキンシップ、気配、気配りなど、補完する位置にあるとみられている要素こそが重要な役割を占める。したがって、ここでも感性が知性（言語）の基礎部分を分担する。

3) 「いのち」や「生きること」への気づき

「感性」は、日頃、あわただしい現実には流されたり、きらびやかさに目を奪われて、見失ったり忘れてしまっている、自己の置かれた立場や人間の「いのち」の本質に思いを馳せるきっかけをもたらしこともある。死、別れ、暗やみ、静寂など、非日常的な状況下にあるとき、たとえば、つぎのようなことがらに気がつくことがある。目に見えない部分、数値で測りにくい部分がとかく軽視され、ために、「いのち」の基盤を脆弱な

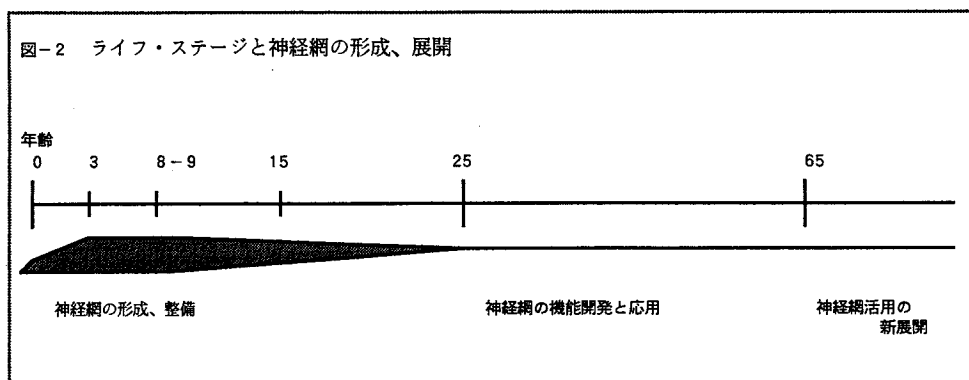
らしめていること、人間は進化の最先端にありながら、他の生物に依存してしか「いのち」を維持できない存在であり、ここに人間の、生きることの責任と自覚が問われること、等々。

このように、感性脳は、生命脳からの「いのちの鼓動」や「生のほとばしり」を受け止め、一方、知性脳がその機能を有効かつきめ細かく発揮できるように働きかける。感性脳は、両者の中間にあって連絡・調整的機能を果たし、結果的に、より柔軟、永続的な生き方を実現するために重要な役割を果たしている。

3. ライフ・ステージと「感性」を基盤とする学習環境の整備

1) ライフ・ステージと神経網の形成

胎内ですでに開始された脳神経細胞と各器官との連絡網の形成（樹状突起の伸長と相互連結）および細胞の「呼び覚まし」は、誕生後、日ごとに広がる世界に合わせて感覚器官や運動器官が活発な展開を見せ始めるとともに、ピッチを速め、3歳頃までに、脳全体のネットワークの大枠を完成させる。脳の構造の充実を裏付けるように、このころ、三歳児の脳の重さは、ほぼ大人並みとなる。この間、母親とのスキンシップや事物との濃厚な接触を通じて、触覚を主力とする感覚諸器官の機能が育まれ、同じ動作の繰り返しを経て着実に力を獲得し（這うこと、立ち上がることなど）、おそらく人類が進化の過程で味わったと同じ感動と満足感を「追体験」する。



家庭から地域社会へ、家族関係から仲間、自然、マスコミとの接触など、格段に変化と密度を増す四囲の環境からの刺激を受けて、8～9歳児ごろまでには、身体全体の各器官との連絡網の整備を終え、かつ、感性脳、知性脳の大部分が「目覚め」、手足の器用さ、運動の活発さ、記憶力、話し言葉、感情表現、対人関係など、その行動の端々に人間らしさが発揮される。脳内の神経連絡網のより緻密な構築と関連する脳細胞の「呼び覚まし」は、学習機会の拡大に伴って、以後も休むことなく続行され、複雑高度な精神活動（創造、情緒）をも可能にする域に達する。

遺伝により人が祖先から受け継いだ脳の基本構造で出発した脳神経細胞の「呼び覚まし」と神経連絡網の形成は、25歳前後にはほぼ終了する。かくして目覚めた脳細胞と縦横に張りめぐらされた神経網は、無限に近い「回路」の組み合わせによって、人生の充実期ともいうべき壮年期において、職業生活、社会生活、家庭生活のいかなる局面にも、広範多岐な活動を持続的に展開する体勢を整える。

生計のため長い間所属した会社・団体等を退き、子どもが独立・自立した後は、組織人や親としての「役割演技」や生活パターンからの開放とともに、これまでの回路を、新局面にふさわしいものへと切り替え、新たな展開を期す秋でもある。人生で初めて得られた、自由でゆったりした時間の流れに即して、自分だけの新たな回路を見いだすのである。新たな形成のための試みもさることながら、回路の再生、ことに、幼少年時に五感をフルに発揮して構築されていた「感性」の回路復元はきわめて容易で、体力面での衰えとは裏腹に、感覚・情緒面では「第二の青春」を迎える。

2)「知性偏重」のひずみ

ライフ・ステージの草創期（乳幼児期）と晩年期（老年期）を除いて、とかく、重視、注目されがちなのは、脳機能中の「知性」（知識、技術）そのものである。進学（学歴）、就職（職業）など実利と結びつきやすく、数値や指標で相対的な評価がある程度可能なことから、競争（強迫）が絡み、一層の偏重傾向を強める。受験準備のためのシフト（学校選択、塾通い、家庭教師）が低年齢化を強め、幼少・青年期全体を「単一の価値観」が支配する傾向にある。一方、企業、官公庁では、スタッフを「狭い組織人」として業績向上、秩序維持のための従属的対応を求める傾向が強く、個人、家庭人、地域人としての立場には伝統的に配慮が少ない。経営合理化（リストラ）、行財政改革を旗印に、ここでも、「単一の価値観」が、ますます強固に支配している。「感性」の裏づけを欠く「知性」は、結局において、知識・技術の、外からの応急的な「詰め込み」に寄与するにとどまり、内から発する、創意工夫や柔軟性に富む、持続的な効果は望み得ない。

学校、社会での「単一の価値観」のはびこりは、ひずみを生み、深め、その価値観の存立基盤である「平和、安全、安定」を揺るがす兆しを内包する。幼児・青少年全般に広がる身体の異常（成人病）、高学歴母親の子育て不適応症候群、家庭および学校における暴力行為、学校不適応児童・生徒の急増傾向、青少年犯罪の凶悪化、高学歴職業人に広がるバーンアウト症候群、秘密主義と利益優先体質のほころびとしての企業犯罪など、いずれも、当事者が世上の大勢や成り行きに流され、知的な体裁や外見は相応に整えながらも、「感性」によるセンサー機能、バランス機能がマヒしていたことが一因となっていたことは否めない。

3)「感性」を基盤とする学習環境の必要性

人類の、「いのち」のリレーの最先端（現役）ランナーとして、人生を「幅広く」、「持

続性を保って」生きるには、「感性」を基盤に据えた、「知性」との位置関係を明確にしておくことが肝要である。舞台ステージに例えれば、両者は、華やかさ、明瞭さ、力強さのスポットライト(知性)と、身近さ、心強さ、確かさ、優しさ、やわらかさのフットライト(感性)との関係に相当する。前者に比べ、後者の存在は目立たないが、終始、さりげなくしっかりと舞台の進行を支える。

「感性」にかかわる脳細胞の「呼び起こし」と神経網の形成の難しさは、条件設定の難しさである。人類進化の跡をたどるかのように、ゆっくりと実感、体験をふまえて進行する「感性」の醸成が、往々にして、能率・効率・実利の「知性」によって妨げられることが少なくないからである。だからこそ、「感性」の意味を見失いがちな状況下であればあるほど、つねに、それを必然的に浮き彫りにするような配慮と装置が必要となる。たとえば、高度情報・産業社会、都市化社会の哲学として、合理化、機械化により生み出されたゆとり分を、すべて「感性」醸成のために振り向けるぐらいの、徹底した運用原理や自己規制を打ち立てない限り、とめどもない自己膨張により、結局は、繁栄が持続性を犠牲にして成り立っていたことを実証する羽目になりかねない。

「感性脳」の健やかな育みには、3つの間(時間、空間、仲間)が不可欠である。つまり、ゆったりとした時の流れ、のびのびと身体や心を伸ばせるような雰囲気の間(空間)の存在、会うとほっとするような仲間たちとの出会いと交流の中で、あたかも、人類が大自然の中で、気の遠くなるような繰り返しの体験を経て進化してきたことを裏付けするように「感性」は、静かにじっくりと育まれる。

然るべきときに、「感性」の基盤がしっかりと形成されてあれば、後に(壮年期、老年期)、必要に応じてネットワークを呼び出し、機能させることができる。「感性」は、普段とかく華やかな「知性」の陰にかくれて目立たないから、人は、時として「知性」を意識的に遠ざける(座禅など)ことによって「感性」を呼び出し、確かめ得る。しかし、元(蓄え)が限定されていれば、展開の範囲は当然ながら狭まる。

ところで、幼少年から青年期までの広範な時期における学習条件整備の、最も組織的な部分を受けもってきたのが今日の学校(近代学校)であるが、ここでは、成立当初、カリキュラム編成に当って、ことさら「感性」にウエイトを置く必要はなかった。家庭や社会で十分育まれた感性(情操)を土台に、学校では、知性(知識、技術)を積み重ねねばよかったからである。事実、少なくとも、この「高度経済成長期」(1958-1972年)前までは、生活の場で占める学校の比重はそれほど大きくなく、「感性」を軸とする人間形成の枠組みを揺るがすことはなかった。しかし、経済施策を中心に据えて強力に進められた諸政策、なかでも、経済を担う人材の促成的な養成施設としての学校依存化、産業立地条件確保のための都市開発、「遊休人材」としての主婦のパート化、都市化や消費経済の急激な普及に伴うサラリーマン家計への圧迫などの現象が急ピッチに展開され、旧来の生活・学習環境は一変した。学歴取得が職業的・経済的地位を得るための切り札となり、いかにして効率よく上級学校に送り込むかが、広く、家庭や学校の目

標になった。経済優先の風潮は、地域から自然を、子どもから遊び場を奪い去り、経済活動に追われる大人と夜遅くまで「学校類似施設」に通う子どもの生活パターンは、家庭から対話とゆっくりした時間の流れを奪った。商業ベースに立つマスコミや情報機器から流れる、外から、バーナーで熱せられるような強い刺激は、欲望を肥大させ、同時に欲求不満を昂進させた。

1970年代の後半に至って、人々は、ようやく、この繁栄が「いのち」にかかわる大きな代償との引き替えで得られたものであることに気がつき始めた。多発する大気・水質汚染、交通事故といった物理的な被害に止まらず、人間性を狂わせ凶悪な行為をもたらす精神的荒廃が身近に大きく広がりを見せたからである。ことに、「感性」を基盤としていた教育・学習の枠組みが崩れたことによる成長途上年齢層へ影響はもとより、その枠組み自体の復元が以後も順調に進まなかった事情が、四半世紀たった今日、若年層の行動に暗い陰を残している。

このような事情下で、学校に期待されることは、短絡的な「スリム化」ではない。当該世代の立場や地域の実態を総体として見極めた上、「感性」に基盤を置く学習環境の整備に向けての着実かつ地道な対応が求められる。ある世代において、ある地域において、学習環境として「感性」醸成の基盤が弱い場合、当面、学校が最も力強く臨機応変な支援・調整機能を発揮し得るからである。

中学校においては、初等教育レベルの学校にくらべ、上級学校への進路準備との絡みで、とかく「感性」に関わる領域はやや軽視されるきらいがあるが、神経網のネットワークをより敏活、緻密なものにして、「知性」の窓口としての機能を高めるとともに、「生きること」を裏付ける情緒のひだを深めるために、「感性」の質的側面の充実はますます必要性を増す。

中学校において、すべての教科が、基本的に、「感性」の醸成に果たす素地を有しているとは言えるが、音楽、中でも「合唱関連行事」は、次項のような実態と実績に基づき、「感性」に基盤を置く学習環境の整備の一翼を担う有力な立場にある。

4. 中学校における、「感性」を基盤とする学習環境の一事例

—「合唱関連行事」の場合—

1)「合唱関連行事」の実施経緯と現状

中学校において、合唱関連の単独行事（合唱コンクール、合唱祭、音楽発表会、文化祭音楽会など：本稿では「合唱関連行事」と総称。ただし、練習過程を含む実践の内容に視点を置いて記述する場合は「合唱」と呼称）が、広く行なわれるようになったのは、1970年代後半以後のことである。1977（昭和52）年7月に全面改定された学習指導要領（昭和56年度から実施）で、学校の創意工夫によって学校生活を「ゆとり」あるものにすることが求められ、その一環として学校行事などに振り向け得る時間数が年間70時間

(旧50時間)に増やされたため、生徒全員参加による文化活動展開の場として、「合唱関連行事」を定期的実施する機運が高まった。

今日、多くの学校では、文化活動を中心に日頃の蓄積と成果を内外に公開する場としての文化祭・学校祭などにおいて、そのプログラムの一部として「合唱関連行事」を実施している(表-1参照)。

表-1 「合唱関連行事」の実施状況(平成8年度)

学校名	学校規模	実施形態	発表内容	練習・発表時の運営	表彰形態	保護者等の参加
岩手県盛岡市立 上田中学校	15学級 550名	合唱コンクール 文化祭(学校行事) の一環として 毎年、10月実施	各学年・学級 課題曲1 自由曲1	音楽科、学級担任 パート・リーダー 厚生委員	最優秀賞・優秀賞 ・優良賞、 指揮者賞 ・伴奏者賞 (学年ごと)	観覧
富山県福光町立 吉江中学校	9学級 330名	合唱コンクール 学校行事として 毎年、11月実施	学年合唱 各学年・学級 課題曲1 自由曲1	音楽科、学級担任 文化学習委員	最優秀賞 金賞 銀賞 銅賞 (学年ごと)	観覧
愛知県尾張旭市立 東中学校	26学級 875名	合唱祭 スクールフェスティバル (学校行事)の一環として 毎年、9月実施	全学年の 縦割り合唱 保護者合唱	音楽科、学級担任 パート・リーダー 合唱実行委員	なし	観覧 出演
大阪府豊中市立 第三中学校	25学級 945名	合唱コンクール 学年行事として 毎年、3月実施	各学年・学級 課題曲1 自由曲1	音楽科、学級担任 パート・リーダー 文化委員	最優秀賞 優秀賞 優良賞 特別賞 (学年ごと)	観覧
鳥根県松江市立 湖北中学校	13学級 399名	音楽会 学校行事として 毎年、11月実施	各学年・学級 課題曲1 自由曲1 教職員合唱 クラブ合唱	音楽科、学級担任 生徒会役員	最優秀賞・ 優秀賞・優良賞、 指揮者賞・伴奏者賞 (全体)	観覧
山口県柳井市立 柳井中学校	15学級 572名	合唱コンクール 文化祭(学校行事) の一環として 毎年、11月実施	各学年・学級 課題曲1 自由曲1 教職員合唱 PTA合唱	音楽科、学級担任 合唱実行委員	最優秀賞 優秀賞 特別賞 (全体)	観覧 出演

この時期(秋季)は、夏休みを含めて比較的時間の余裕があり、準備過程における相互の交流、協力の成果は計り知れないが、生徒の関与するクラブ、学級展示など活動が多岐にわたるので、音楽活動としては、やや集中を欠き、効果を十分に発揮できないきらいもある。一方、少数ながら、学年末(3月)に独立して「合唱関連行事」を実施している例もある。学校規模の関係で文化祭に関連行事を組み入れにくい事情もあるが、学年末の慌ただしい日程をやりくりしての準備ながら、中学校生活、学年・学級生活のしめくくりとして、重要な役割をはたしている。

ステージで発表する曲目は、学年共通の課題曲と各クラスで自由に選択する曲（自由曲）との2曲の場合が多い。課題曲、自由曲ともに、生徒たちの心情や身近な生活が実感ゆたかに描かれ、親しみやすく美しいメロディをもつ曲がよく歌われる（表－2参照）。

表－2 「合唱関連行事」での演奏曲目一覧（平成8年度）

	第一学年	第二学年	第三学年
盛岡市立上田中学校	【課題曲】 「愛は限りなく」 【自由曲】 「マイ・バラード」 「マイ・バラード」 「怪獣のバラード」 「すばらしい愛をもう一度」 「涙をこえて」	【課題曲】 「あたらしい一日」 【自由曲】 「海の不思議」 「遠い日の歌」 「友よ北の空へ」 「新しい世界へ」 「森の狩人アレン」	【課題曲】 「リパブリック賛歌」 【自由曲】 「Soon-ah will be done」 「青葉の歌」 「未来」 「ひとつの朝」 「流れゆく川」
福光町立吉江中学校	【学年合唱／課題曲】 「夢は天空をかける」 【自由曲】 「モルダウの流れ」 「冬が来る前に」 「未知という名の船に乗り」	【学年合唱／課題曲】 「若い翼は」 【自由曲】 「マイ・バラード」 「遠い日の歌」 「時の旅人」	【学年合唱／課題曲】 「大地讃頌」 【自由曲】 「ひとつの朝」 「木琴」 「消えた八月」
尾張旭市立東中学校	《全学年の縦割り合唱》 A組 「山のいぶき」 B組 「風は今」 C組 「若い翼は」 D組 「遠い日の歌」 E組 「さようなら」 F組 「風は今」 G組 「時の旅人」 H組 「遠い日の歌」		
豊中市立第三中学校	【課題曲】 「Tomorrow」 【自由曲】 「流れゆく雲を見つめて」 「明日に渡れ」 「朝もや街角」 「旅立ち」 「マイ・バラード」 「はばたこう明日へ」 「光の中へ」 「フェニックス」 「風に吹かれて」	【課題曲】 「心の瞳」 【自由曲】 「Let's search for Tomorrow」 「Tomorrow」 「風は今」 「若い翼は」 「時の旅人」 「夏の日の贈りもの」 「遠い日の歌」 「少年の日は今」	【課題曲】 「ひとつの朝」 【自由曲】 「さよならと言おう」 「Refrain Regrets」 「涙のむこうに」 「青葉の歌」 「時の旅人」 「もえる緑をここに」 「はばたこう明日へ」 「美しい季節（とき）」
松江市立湖北中学校	【課題曲】 「夏の日の贈り物」 【自由曲】 「カリブ 夢の旅」 「はばたこう明日へ」 「涙をこえて」 「そのままの君で」	【課題曲】 「Let's search for Tomorrow」 【自由曲】 「遠い日の歌」 「名づけられた葉」 「My Friends」 「時の旅人」	【課題曲】 「マイ・バラード」 【自由曲】 「モルダウ」 「空」 「ひめゆりの塔」 「翼をください」
柳井市立柳井中学校	【課題曲】 「夢の世界を」 【自由曲】 「山のいぶき」 「野生の馬」 「遠い日の歌」 「涙をこえて」 「Let's search for Tomorrow」	【課題曲】 「ともしびを高くかかげて」 【自由曲】 「君をのせて」 「野生の馬」 「そのままの君で」 「樹氷の街」 「海よ、お前は残るだろう」	【課題曲】 「消えた八月」 【自由曲】 「ひとつの朝」 「時の旅人」 「名づけられた葉」 「一羽の鳥」 「走る川」

ことに、自由曲の選曲には、クラスの意欲と熱意が結集され、雰囲気やセンスが反映される。定時の音楽の時間で基本部分を中心に指導と練習が進められるが、その展開、深化は、各クラスの自主活動にゆだねられる。クラスの世話人（担当委員）が各パートの代表者（パートリーダー）や指揮者、伴奏者と打ち合わせながら、時間や場を調整、設定して、練習をかさねる。放課後に、昼休みに、さらには始業前（早朝練習）にまで広がる一連の自主練習を、学級担任が側面から支え、励まし、ときには一緒に口ずさむ。そして、やがて、クラスメンバーのところが、ひとつの心地よいハーモニーとなって完成に近づく。

中規模以下の学校では、大部分が同時に異学年の発表を聴いて、相互の成果、感動を確かめることができるが、大規模校では、一部に、全学年の「縦割り編成」などの工夫を凝らしているところもあるが、多くは、発表会場や所要時間の関係で、分散（学年単位）実施とならざるを得ない。他の機会をとらえて、発表の一部を全体に披露する機会を設けるにしても、折角の感激と熱意を全校生徒が同時に共有することができないとすれば、「生活の場」としては最小限の機能さえも生かし切れていないことになる。比較的規模の小さい学校でよく見受けられる、全学年生徒のみならず、教職員や保護者の発表の場をも設け相互交流、交歓の機会をひろげようとしている取り組みは、実施上の課題（会場の設定・運営や教職員間の意思疎通の問題）を含めて、密度が高く、気脈が通じあえるような「合唱関連行事」を実施できる条件の視点から、学校規模の在り方を考える上での手がかりとなる。

2)「合唱」の意義と役割

学校における芸術教育、ことに音楽教育には、単なる一教科の枠をこえて、教育・学習のみならず青少年の生活全般の基礎部分の形成に寄与する、いわば、基礎的・総合的な性格をもつものであることは、古くから唱えられてきたことであるが、「神の似姿」に近づくためとか、「国家政策としての精神統一」のためとかの、哲学・宗教的な解釈や政治的な手段としてではなく、「人間性の発露」を力強く支える意義と役割は、時代を超えて変わらない重要性をもつ。人類の進化の過程で獲得した力の基礎部分を、着実に「呼び覚ます」ことを支援する意味においてである。ことに、その過程で、五感を働かせ、長い繰り返しを経て体得して蓄積した「感性」の「呼び覚まし」に、「合唱」による練習と達成の過程はきわめて有効である。なぜなら、「ひとり一人がメンバーとしてかけがえのない存在であり、もてる力と心をあわせ、燃え、完成のよろこびと感動を分かちあう」、合唱の、このプロセスは、人類進化の過程で、ヒトが人間になるために幾度なく繰り返してきた諸体験の原型に外ならないからである。

「合唱」が、その過程を通じてもたらすもの、それは、以下にのべる3点に集約されるような、「いのち」や生活に対する「感性」を軸とした認識の深まりと情緒の深まりである。「知性」に開かれた窓としての「感性」の豊かさは、やがて、創造性、定着性、

『ひとつの朝』(作詞 片岡 輝)

いま 目の前に ひとつの朝
まぶしい光の洪水に
世界が沈まないうちに
さあ 箱船ののって 旅立とう
あのノアたちのように 旅立とう

たとえば 涙に別れること
たとえば 勇気と知り合うこと
たとえば 愛を語ること
たとえば 孤独と向き合うこと
旅立ちには いくつもの出会い

いま 目の前に ひとつの海
さかまく怒涛の攻撃に
船が砕けないうちに
さあ 両腕を翼に とび立とう
あの鳥たちのように とび立とう

はばだけ明日へ
まだ見ぬ新しい大地へ
生きる喜びを
広げる自由を求めて

『もえる緑をこころに』(作詞 関根栄一)

新しいビル 新しい建物 光り輝く街
人と車と あふれる品物は
世界のすみずみから届けられた
私たちは いつでも知らされていた
においを知る 見て聞いて さわる味わう
豊かなこの国の この町並みを歩きながら
世紀の先端の風を感じる

とりどりの花 とりどりの果物
愛がほほえむ街
音と色とり しびれる感触に
いつしか慣れてしまい 忘れていた
私たちは それでも知らされていた
草木が枯れ この大気 水の汚れを
豊かなこの国の この矛盾に
いま あなたにできることは何かと
問われている

私たちにできることは
思うことですか ないのでしょうか
この大地の恵みをなくさないために
もえる緑をこころに

『涙の向こうに』(作詞 井上文章)

悲しいとき 涙がとまらないとき
空を見上げてごらん 真つ青な空を
こぼれ落ちる涙のむこうに にじんで見える
遠い星のかたから
ひらひらと 夢がふりそそぎ
こぼれ落ちていく涙が
ダイヤモンドの結晶にかり
君のこころは ときめいて
大きな希望があふれる

飛べ 自由に 時を超えて
はばだけ こころの翼ひろげ
その涙のむこうには
輝く未来がある

バランスに富む認知構造として結実する。

まず第一に、「合唱」は、メロディに裏打ちされた歌詞のフレーズや語句を繰り返すことによって、自己や他人の気持ちや立場、人間関係、「いのち」とそれを育む環境などについて、それまでの人生でのすべての経験、体験を照合、確認、再認識させ、同時に、普段見えなかった側面に気づかせ、認識を新たにさせる。たとえば、『ひとつの朝』(左記の歌詞参照)の歌を通して、「出会い」、「愛」、「別れ」、「孤独」などが、単なる「言葉」ではなく、普段の生活や現在の置かれた立場(卒業を間近に控えた日々)をふまえた「感性」に裏づけされて初めて意味をもち、いきいきと輝くことを実感する。また、『もえる緑をこころに』などの歌を通して、環境や身体・心の健康など人間が抱える諸課題の本質と対応について、形式的な、その場限りの知識としてではなく、心の片すみにともされたささやかな灯火が徐々に内面に力強く広がるような、「いのち」や生活環境に対する心情的理解を深める。さらに、『涙のむこうに』などの歌を通して、さまざまな立場、考えかたをもちながらも、同世代の若者として、あるいは、生活の場(時間・空間、人間関係)を共にする仲間として、それぞれに希望、夢、生きがい、情熱をもち、同じように悩み、苦労や困難を乗り越えようとしていることを、単なる言葉じりではなく、しぐさや表情を含めた全感覚で確かめ、「生きること」の励みや力を得る。

これらは、いずれも、国語、社会、理科、道徳などの分野で扱う教材と密接にかかわるものであるが、教室で教科書を通じての学習が、ややもすれば一般的、観念的、散発的な傾向を帯びがちなのに対して、「合唱」の場では、内発、個別、具体、実感を伴って、既存の知識や経験を確認、統合し、創造的な展開を促すことを可能ならしめている。「感性」のゆたかな介在が、この差異を決

定づけていることは言を待たない。ここに、音楽が、教科を超えた基礎・基幹としての性格を備えているといわれる根拠がある。

第二に、「合唱」は 創造するよろこび、共感、達成感（心地よさ、満足感）を、心をひとつにして参加したものに等しくもたらす。練習の諸条件をめぐる幾多の障害や技術上の壁に直面し、試行錯誤を繰り返えし、悩み、苦しみもメンバーの知恵と協力で乗り越える、いつもながら展開される「合唱」の練習過程には、数限りない「ドラマ」が生まれる。

シナリオのない、この世でただひとつの、しかも、全メンバーが「主役」の、この「ドラマ」には、与えられたさまざまな条件を率直に、謙虚に受け止め、自分たちの持てる力を結集して、自分たちなりのやり方までとりついたよろこびのシーンがある。たとえば、技術的には多少の拙さがあったにしても、ステージ上の、声と表情にゆたかに表われる満足感、達成感のほとばしりは、居合わせた人々のところにストレートに伝わり、共感の波が広がる。

また、賞や他人の目を気にしていた初期のこだわりがうそのように消え、ただひたすらみんなと心と声をあわせることの愉しさにひたっている、それまでの自分とはちがう、本当の自分の姿にめぐりあう、感動的なシーンもある。人間は、いくら知識を積み重ねても変わらないが、自分らしさを見出した、そのときに大きく変わる、と言われる。これは、豊かな人間関係の中でしか生まれない人間行動の特性であり、その意味で、「合唱」のプロセスには、最も人間的な触れ合いの機会としての可能性が備わっている、といえる。

第三に、「合唱」は、内発性、多様性、個性、絶対性の確かさを、実感させる。

「合唱」では、練習の過程で共通の目標を掲げ、その域に達することを励みとするが、メンバーの資質の均一化を目指すものではない。逆に、「混成の美」、「多様性の奥行の深さ」を期し、成員の個性の豊かな発揮を前提にして成立する。一人ひとりの過去および現在の環境が異なり、一人ひとりが独自の人生をもっているように、一人ひとりが、ものの感じ方、とらえ方を異にする。雑木林などに見られる自然の風景が、雑多ながら、見事な力強さとまとまりを形づくっているのと同様に、個々の特性を十分に発揮させ、ひとつのまとまりをつくりあげるのが、「合唱」である。したがって、その場には、外から内へのベクトルよりも、内から外へのベクトルが、より満ちていなければならない。

「感性」の発動は、個性そのものであり、その発露には、自由な雰囲気、ほっとするような安心感が不可欠である。「知性」は、相対的（可測的）なものであるのに対して、「感性」は、その個人の内面から発する独自のものであり、絶対的で比較不可能な、その意味で悠久性をも備えた性格をもつ。「合唱」は、後者（感性）を基盤として成立するものであり、このことが、自然や人間（人間も自然から生まれ自然を構成する一部分である）の描写、表現において、「合唱」がもっともすぐれた特性を発揮する所以である。

3)「合唱」をめぐる環境整備の方向性

「合唱」が、その特性を発揮して、中学校の全生活を通じて「感性」醸成の支援の役割を果たすためには、環境（学習環境）整備に向けていくつかの課題に取り組まなければならない。

第一に、中学校の教育課程における音楽の時間の位置づけ、これに連動する時間配当、スタッフの充実に関する課題である。音楽、とくに「合唱」については、他の教科で扱う内容の深化、定着に寄与し、同時に、日常生活（精神衛生、人間関係）や認知過程の基幹部分と密接な関連をもつものであることからすれば、既存教科の枠組みから切り離し、総合・基幹領域をうけもつものとして、別途独立して位置づけられるべきであろう。現状のように、特別活動の時間を「合唱」向けに細切れに配当するのではなく、全学年を通じて日常的、継続的でさりげなく、かつゆったりした時間の流れの中で進められる活動（計画・練習・発表）を、その常態とするのである。このことによって、「合唱」の練習のために平常時間帯外に不定期に時間枠（7時間目）を設定したり、加熱防止のため他教科の自習時間での練習を禁止にするなどの、不自然な運用は解消される。

「合唱」は、小学校で試行されようとしている英会話、情報機器操作、環境問題などを内容とする「総合学習」より、はるかに「総合」の性格を備えたものであり、かつ、日常生活、認知過程における「基幹」という意味では比類ない地歩を占めている。

第二は、「合唱」の練習・発表の場、交流・交歓・共感の場としてふさわしく、日常的に手軽に活用できる施設整備の課題である。殺風景な体育館を学校行事などに兼用する、非文化的な慣行にそろそろ終止符を打ち、集会、発表・鑑賞用に、充実した音響設備を整えた専用施設（ホール）を、少なくとも中学校には常備すべきときがきた。中学校専用施設にこだわらず、校区内各小学校および地域住民との共用施設とすれば、建築費や施設設備の維持管理をめぐる負担や障害が少なくなり、地域交流の拠点として格段に充実した施設の確保が容易となる。

「人間性の発露」を存立の基盤とする学校の立場と在り方は、「感性」の育みに不可欠な、「過程、場、関係のゆたかさ」によって方向づけられる。学習環境整備において、この視点を欠くことは、学校の存立基盤そのものを失うことでもある。「合唱」実践の、ささやかな、しかし着実な展開は、その基礎固めの延長線上にある。

むすび

教育や学習の営みには、内から湧き上がる意欲とわくわくするような感動がともなっており、こそ意味がある。乳幼児が、幾度もの「繰り返し」を経て、這い、立ち上がり、歩き始め、片言を発し始めた時の、全身にあふれる満足の表情に、その原型がみられ、それは、また、人類が長い歳月をかけて一つひとつ力を獲得した過程の再現でもある。いかなる高度で複雑な理論、技術、行為も、感覚の目覚め、「感性」の醸成から始まり、そ

の「土俵」上に、それを裾野として、「知的」な展開が進められる。情報化社会、国際化社会、高齢化社会など現代社会を支える基盤は、きわめてありふれた、単純なものであり、だからこそ、このことは、複雑さこそが高度だと思いこんでいる人々や「強迫(競争)」という付加装置を仕掛けることによって利得を目論む人々には、当初から「気づき」の範囲外に置かれているものなのかも知れない。

(注)

本稿は、これまでの研究成果(A)の底流にある課題について、実際の状況を観察記録する方法(B)により得た知見を土台に、関連文献等(C)を参照してまとめたものである。

本文、図表ともに、下記諸資料からの、直接の引用はない。

A [著書論文]

1)「学習環境学研究序説——学習条件整備の方向性」

(『大阪大学人間科学部紀要』第22巻、1996年 所収)

2)「イメージ分析の手法による学習環境論序説」

(放送教育開発センター「研究紀要」第7号、1992年 所収)

3)「学習環境論序説——映画史料のイメージ分析によるアプローチ」

(阿部 彰『人間形成と学習環境に関する映画史料情報集成』風間書房、1993年 所収)

4)「校歌論——豊中市立学校の学習環境イメージ」

(豊中市史編纂委員会『市史研究紀要』第2号、1993年 所収)

5)「下村兼史論——内に情熱を秘めた<案山子>」

(『大阪大学人間科学部紀要』第20巻、1994年 所収)

6)「史料としての映画研究序説——教育関係映画を中心として」

(『大阪大学人間科学部紀要』第14巻、1988年 所収)

7)「ドキュメンタリー映画論」

(『大阪大学人間科学部紀要』第16巻、1990年 所収)

8)「ドキュメンタリー映画の製作」

(『大阪大学人間科学部紀要』第19巻、1993年 所収)

9)「対日占領における民間情報政策——ナトコによる啓蒙活動の実態と背景」

(『大阪大学人間科学部紀要』第9巻、1983年 所収)

B [映像記録]

練習時は2台、発表時は7台のビデオカメラで多方向から同時撮影し、編集

(個別編集版)

編集作品のタイトル名	学年	収録年月日	編集作品の 記録時間(分)
1 『豊中市立第十三中学校 合唱祭の記録』	第三学年	1991年3月2日	115
2 『豊中市立第三中学校 合唱コンクールの記録』	第三学年	1993年3月5日	116
3 『豊中市立第十三中学校 合唱祭の記録』	第三学年	1994年3月2日	97
4 『豊中市立第三中学校 合唱コンクールの記録』	第三学年	1994年3月5日	116
5 『豊中市立第三中学校 合唱コンクールの記録』	第三学年	1996年3月6日	69
	第一学年	1996年3月16日	82
	第二学年	1996年3月18日	102
6 『豊中市立第三中学校 合唱コンクールの記録』	第三学年	1997年3月6日	116
	第一学年	1997年3月18日	104
	第二学年	1997年3月19日	127
7 『島根県松江市立湖北中学校 音楽会の記録』		1997年11月20日	240

(総合編集版)

編集作品のタイトル名(概要)	制作年月日	記録時間(分)
1 『豊中市立中学校 合唱関連行事の記録 1994』 (1994年2-3月収録、第三・第十三中学校における、第三学年の練習および発表のハイライト)	1995年3月30日	77
2 『豊中市立第三中学校 合唱コンクールの記録<練習風景集成>』I (1996-7年収録、第一学年から第二学年にかけての、発表前40日間の継続観察記録)	1997年5月2日	93
3 『豊中市立第三中学校 合唱コンクールの記録<練習風景集成>』II (1996-7年収録、第二学年から第三学年にかけての、発表前40日間の継続観察記録)	1997年5月9日	104

C [参考文献等]

《1》

- ・時実利彦『人間であること』(岩波新書、1970年)
- ・L. マンフォード、久野収訳『人間—過去・現在・未来』下、(岩波新書、1984年)
- ・和田重正『もうひとつの人間観』(地湧社、1984年)
- ・井尻正二『ひとの祖先と子どものおいたち』(築地書房、1979年)
- ・荒井 良『脳と健康』(雷鳥社、1979年)
- ・本川弘一『教育と脳生理学』(IDE教育選書、1968年)
- ・久保田競『脳の発達と子どものからだ』(築地書房、1981年)

・池見西次郎「心身医学とは」(『学会会報』No788、1990年)

・伊藤正男「脳研究と教育」(『文部時報』1276号、1983年)

《2》

・飯島 衛『多様性と個性——生物学基礎論への試み』(みすず書房、1978年)

・中村勝己『経済的合理性を超えて』(みすず書房、1988年)

・花崎皋平『生きる場の哲学——共感からの出発』(岩波新書、1981年)

・近藤章久『感じる力を育てる』(柏樹社、1980年)

・増成隆士『感性の窓を開けて』(みすず書房、1997年)

・クリシュナムルティ、大野純一訳『英知の教育』(春秋社、1988年)

・R. アルンハイム、関計夫訳『芸術心理学』(地湧社、1987年)

・B. K. ウエンホールド、手塚郁恵訳『ホリスティック・コミュニケーション』(春秋社、1996年)

《3》

・指定都市教育研究所連盟編『子どもと環境』(東洋館出版社、1988年)

・河合雅雄『子どもと自然』(岩波新書、1990年)

・野間教育研究所編『家庭環境の教育に及ぼす影響』(講談社、1953年)

・坪田譲治『マスコミの中の子ども』(弘文社、1961年)

・藤本浩之輔『子どもの遊び空間』(日本放送出版協会、1974年)

・住田正樹『子どもの仲間集団の研究』(九州大学出版会、1995年)

・指定都市教育研究所連盟編『地域社会における子どもと生活』(東洋館出版社、1976年)

・木村虔文『都市の遊び場』(鹿島出版会、1973年)

・高橋 敷『遊ぶ力と生きる力』(朱鷺書房、1989年)

・和田重宏『親を育てる』(地湧社、1997年)

・中村雄二郎「人間の時間について」(『図書』 No341、1978年)

・A.D.Pellgrini "School Recess and Playground Behavior —Educational and Developmental Roles"(State Univ. Press of New York, 1995)

・R.A.Jones "The Child-School Interface—Environment and Behavior"(Casell,1995)

《4》

・プラトン、藤沢令夫訳『国家』第三巻(岩波文庫、1979年)

・H. リード、周郷博訳『平和のための教育』(岩波現代叢書、1952年)

・中井正一『美学入門』(朝日選書、1975年)

・石川毅『芸術教育学への道』(勁草書房、1992年)

・J. B. マーセル、美田節子訳『音楽教育と人間形成』(音楽之友社、1967年)

・小山章三『合唱と音楽と——音楽教師の手記』(音楽之友社、1981年)

・佐々木基之『耳をひらく——人間づくりの音楽教育』(柏樹社、1985年)

- ・ 林 光『歌の学校』(音楽之友社、1993年)
- ・ 岡山好直『校舎の調律—学校の音環境を見直そう』(音楽之友社、1991年)
- ・ S.B.Bacharach "Image of Schools"(Corwin Press, 1995)
- ・ W.K.Hoy "The Road to Open and Healthy Schools"(Corwin Press, 1997)

《「合唱」を主題とする映画作品》 大阪大学人間科学部阿部研究室所蔵

- ・ 『ドレミハ先生』(諏訪中、八洲秀章<「あざみの歌・さくら貝の歌」などの作曲者>：教映作品、52分、1950年)
- ・ 『音楽教師』(旧制府立一中など、梁田貞<童謡「どんぐりころころ」などの作曲者>：東映教育映画部作品、48分、1961年)

Has the Meeting for Singing in Chorus at Junior-High-School any Merits for cultivating pupils' Sensibility?

Akira ABE

From the latter half of 1970's most of Junior-High-Schools have started to hold regularly "the meeting for singing in chorus"(the contest of singing in chorus) every year, at fall mostly or at the end of school-year partly. For the Meeting pupils of every classes have well trained in their singing in chorus day after day at lunch time, or after school, and even at early morning before school-hours. On the day of Meeting they have sung their songs by turns on the stage of Assembly-Hall. Best, Better, Good classes have been celebrated on their efforts and glory by their school-mates, parents and teachers.

One of the important, that they have learned through the process of the preparations for meeting of singing in chorus, is the meaning and role of the Sensibility to every mental and social phases.

Why is the Sensibility very essential for our better life?

Several reasons are the following :

The 1st is that the Sensibility has the function such as the door, opened to the Intelligence. Every motion and extension on the Intelligence starts with the acception of any informations from the Sensibility. As the Sensibility is reflected by one's own feelings, interests and patterns of one's conduct, the Sensibility is also the "spring" of one's creative activities, personality and individuality.

The 2nd is that we can often make the decision with the support of the Sensibility.

When we stand still in complicated problems or lose our going way, the Sensibility used to select in a moment some useful and suitable from past and new informations, and show us the way to go ahead. It should be called as "total power" of human activities, leaded by the function of the Sensibility.

The 3rd is the essence of the awareness. The Sensibility often catches the delicate and slight signals and tell us to keep away from the danger or unsuitable situation for our long life.

Therefore, What should we do to get firmly the above mentioned, essential and useful : the Sensibility?

For cultivating of the Sensibility, the most important stage of our life is infant-stage, childhood-stage and youth-stage(about 0-25 ages). During these stages, we have chances of training our minds and bodies in the environment full of variety and value.

Espesially "3-Spaces"(time-space, field-space, human-relation) are indispensable for developing the Sensibility in moderation.

In these recent years, it shows the tendency to make light of the Sensibility, in comparison with the Intelligence, for the reason that the Sensibility isn't useful at all for getting the admission into schools or the permit of employment. But the Sensibility is essential for living one's life full of continuous and adaptable. Today we are forced to confront with many warps, caused probably by the lack of the Sensibility.

Most phases of these warps : school-violence, home-violence, luck-adaptability to school or working-place, juvenile delinquents are closely related with many pupils of Junior-High-Schools.

Under this present situation, "the meeeting for singing in chorus" at every Junior-High-School will be surely useful for backing up of the Sensibility and recovering pupils' spirits and powers for the future.